

茅 風

— Breeze from the field of thatch-grass —



2011年8月31日

森林塾青水

事務局便り

茅風通信 34号



青刈りの光景～林立する茅ボッチ

□4～8月の活動報告とトピックスあれこれ（事務局）…… 1

◆上ノ原のカヤが被災地仮設住宅の断熱材に！

□野焼き「東日本大震災の鎮魂と復興の祈りを込めて」…… 2

・2011年度「野焼き顛末記」(草野洋)

・参加者代表の皆さまのご感想(島貫倫子&落合暢之 関根静吾
さらちゃん 森脇みなみ 板橋駿介 前田剛宏)

□芦ノ田峠フットパス歩きと上ノ原の生き物・外来種調べ……6

・芦の田物語(林 勉み子)

・言葉不要の草地という自然環境の魅力(出島誠一)

・ニセアカシア驚異の繁殖力！！(小野 丞)

■特集：青刈り「また一つ、ススキの新たな利用の道が！」…8

・炎天下の防火帯造りと青刈り 流した汗も生態系サービス(草野洋)

・参加者代表の皆さまのご感想ご意見

(酒井一彦 石原光恭 増井大樹)

◆特別寄稿「のらえもん 10周年…」(古高利男)……12

□編集後記～塾長のつぶやき～……13

◆9月24日～25日「講座コモンズ村ふじわら」開催案内……14

■ 4～8月の活動報告とトピックスあれこれ

事務局

●4月16日～17日：山の口開けと再開して8回目になる野焼き。今年は、東日本大震災の「鎮魂と復興の祈り」を込めて開催。当初予定の16日午前10時半、それまでの青空が急転雨に。涙雨だったのか。翌17日は、参加老若男女97人(2日間延べ)の思いがなつて絶好の野焼き日和に。萬枝さんはじめ地元の皆さま方、町役場、町田工業の皆さま方のご指導ご協力のお陰で、無事故開催8年連続となりました。ありがとうございました。(→2頁ご参照)

●5月14日～15日：講座「コモンズ村・ふじわら」開催。参加20名(地元・日帰り6名)で上ノ原の生き物調べと原木キノコの植菌ならびに青木沢峠のフットパス歩きを楽しむ。

●5月21日：麗澤中1年生対象の「樹木観察会」のお手伝いを日大・生物資源学科の学生諸兄と共に。

●6月18日～19日：講座「コモンズ村ふじわら」開催。参加18名(地元・日帰り8名)で上ノ原の生き物調べ・外来種対策と芦ノ田峠のフットパス歩き。青木沢峠に続き今回も、地元から林勉み子さん、深津ふみ子さん、中村智子さんがフットパス歩きにご同行いただきました。19日には、古高さん率いるしかはま自然観察会「のらえもん」のご一行45人が合流。草原に元気なハラガキたちが跳梁跋扈しました！(→6頁、12頁ご参照)

●6月26日：一畝田の古民家「みんなの家」(仮称)の大掃除。北山所長、梅宮さん、清水の3人で、築100余年の塵埃を落とし畳みを揚げました。とても、一回で住める状態にはできませんでした！

●7月7日：福島被災地仮設住宅の屋根断熱材に使ってもらうことになった茅ストックの運び出し。お手伝い

いただいた一幸さん、真人さん、木村さん、西山さん、ありがとうございました。(→下記トピックス、ご参照)

●7月21日：麗澤中1年生164名「水源の森フィールドスタディ」の受け入れ。同日、松江中学2年生190名の間伐体験学習も併行受入れ。上ノ原に若者たちの歓声が木霊した！参加スタッフ7名、ご苦労さまでした。

●7月25日：みなかみ町商工会主催・生物多様性セミナー。「みなかみは宝の山～お客さまのもてなしに素晴らしい自然を伝えよう」と題して講演の後、参加者を藤原・上ノ原にご案内・エクスカージョン(北山、清水)

●8月6日～8日：早稲田環境塾とのコラボレーション合宿。ススキの青刈りとセミナー「なぜ、上ノ原の“入会地”の復活を試みるのか」開催。参加72名(3日間延べ)。ご協力ご指導いただいた吉野区長、久さん、惣一郎さん、仁三郎さん、親男さん、好一さん、江口さん、関さん、町田社長、役場の真庭課長、木村さん、西山さん、ありがとうございました。(→特集・ご参照)

○トピックス：3つ

・上ノ原のカヤが被災地仮設住宅の断熱材に！



2011年7月7日七夕が記念すべき日になりました。昨秋刈り取ってストックしていたカヤ366束が、4トン車1台に積み込まれて合津若松市に向かいました。目的地は東日本大震災被災者向け仮設住宅の建設現場。日本茅葺文化協会を通じて、国産スギ材による板倉構法で仮設住宅建設中の佐久間建設工業に寄贈され、住宅17棟36戸の屋根用断熱材として活用されることになったのです。(写真・前頁右下)7月中に工事完了、既に大熊町からの被災者の皆さんの入居が始まっております。

かくして、上ノ原のカヤの今日的用途がまた一つ増えることになりました。これまでの茅葺文化財建造物の屋根材、8月に予定している野菜・果物のマルチ材と肥料。そして、この度の断熱材。ご縁を取り持っていただいた草原再生ネットワーク、お声がけいただいた茅葺文化協会、快くご協力いただいた藤原区ならびにみなかみ町役場の皆さまのお陰です。謹んでご報告お礼申し上げます。(詳しい経緯→ホームページご参照)

・十郎太沢の水汲み場に「水守の像」が出現！

6月19日、「水守の像」の除幕式を行いました。(写真・下)優しい女性が瓢箪とおぼしき器に水を入れて、大切に抱えているお姿です。地元の朝倉隆志さま(ペンション「夢工房」ご主人)が1年以上かけて黙々と彫刻、当塾にご寄贈のお申し出を頂いたものです。「飲水思源」を合言葉とする当塾としては実にありがたいこと、喜んでお受けし水汲み場に設置させていただきました。

「夢工房」は、藤原をこよなく愛するご夫妻が経営する“清潔感あふれる温泉よし料理よし”の素敵なペンションです。一度、訪ねてみて下さい。



・屋根替え工事後、初の諏訪神社夏祭り

好天に恵まれた8月17日、恒例の藤原諏訪神社の例大祭でした。大勢のご家族ずれが、鎌倉時代から800有余年連綿と伝承されてきた獅子舞や奉納相撲を和気あいあい楽しんでおられました。昨秋葺き替えられた舞殿の屋根(正面側)が木漏れ日のなかでことさら清々しく写って見えました。(写真・右上)



■野焼き「東日本大震災の鎮魂と復興の祈りを込めて」

再開8年目の今年。東日本大震災の鎮魂と復興を祈って開催。みなかみ町は被災地福島県の皆さまを積極的に受入れ、藤原の民宿にもいわき市の被災者の方々が多数滞在中でした。(編集子)

◆2011年度の「野焼き顛末記」 草野 洋(塾頭)

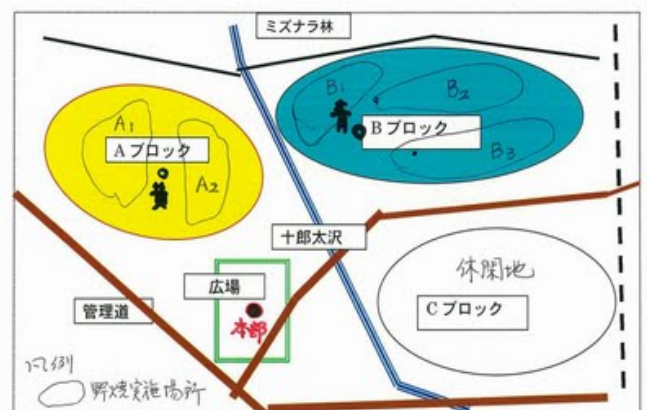
鎮魂と復興の火入れ

2011年度の青水オープニングイベントである8回目の野焼きが4月17日実施された。今年は3月11日に発生した東日本大震災と福島第1原発事故の「被災者への鎮魂と一日も早い復興を祈る」として臨んだ。ちなみに、みなかみ町そして地元藤原にもいわき市等から30数名の被災者の方が避難しておられます。

除雪隊の奮闘

2月の打合せの折、今年の野焼きは3ブロックのうち管理道下のCは休閑地としてAとBとするが特に十郎太沢南側管理道上のBを重点的に実施することを申し合わせて除雪をやっていた(野焼き実施図参照)。

野焼き実施箇所概念図



ところが3月になって何度か積雪があり除雪開始時でも120～180cmもあり例年より50～100cmも多い状況、2名の除雪隊のご奮闘もあって約1週間の乾燥期間を含めてどうにか間に合いました。前日、現地の状態を確認し実施可能と判断して準備にかかりました。それにしても積雪の多さと除雪の苦労がしのばれる雪



山の高さである(写真・上)が安全・安心の野焼きを保証する雪の壁である。

自然には勝てない順延やむなし

前日はもちろん当日も天気上々で実施を疑うことなく行った準備作業は汗をかくほど。しかし、参加者が集まる直前の 10 時半頃から青空はにわか雨雲に覆われ、ついに冷たい雨も降りだし気温 4 度、湿度 70% となった。試しに着火しても燃えない、延期を覚悟して参加者の到着を待ちました。11 時 30 分、地元・役場・森林管理署・青水の 4 者協議で明日に延期と決定。この日はオープニングセレモニーと十二様に入山のお許しと今年一年の作業の安全を祈って山の口開き神事を行い(写真・下)、1 時間ほどの除伐を行って、早目に宿に帰ることとしました。その後、塾で契約予定の古民家を視察するなどして過ごした。



あきらめないぞと野焼き再挑戦

この日は朝から快晴。現地を確認すると茅は濡れているが適当に風もあり数時間をかければ十分に乾燥して実行可能と判断。むしろ延焼の心配は吹き飛び安全作業が出来ると確信し準備に。9 時半に 4 者協議、実行可能だが出来る限り乾燥時間を持つこととし、列車の時間から逆算して 13 時ごろ着火、14 時前に鎮火とすれば 10 時から実施方法の説明や野焼き講習会、11 時半昼食の段取りと決定。10 時半頃に野焼き講習会等を終了し、その後の時間をどう過ごすか思案して

いたところ親男さんからエキスカを提案していただきほとんど全員が参加して有意義な時間となりました。燃え上れ鎮魂と復興の炎 13 時、茅が十分乾燥していることを確認。この時の気象条件は、気温 15 度、湿度 30%、風力 4~5m、風向南、参加者は A、B の 2 班に別れて野焼き開始。この日の参加者は 35 名、地元及び役場ほかの応援部隊 12 名、見学者・写真撮影など 12 名、それに消防団 8 名の方が火防巡視で立ち寄っていただき総勢 67 名が上ノ原で鎮魂と復興の野焼きの炎に願いを託しました。13 時 10 分 A 班が着火し、続いて B 班も着火、白い雪と青空に灰色の煙とオレンジの炎が上がり、パチパチと勢い良く燃え始めた。延焼の心配ないこともあり本来は斜面上側から着火すべきであるが今回は下側からの着火も可としたことから勢い良く炎が上がる。火消し棒やジェットシュータ、スコップは用なしであった。(写真・下)



30 分後には火と煙と茅原の燃え跡が広がり雪原と青空をバックにした上ノ原の野焼きらしい光景がよみがえった。まさに、「雪間を焼く」である(写真・下)。



約 1 時間が経った 13 時 50 分ごろ予定した箇所を焼き尽くしたことから、広場に引き上げ異常ないことを確認。13 時 55 分に鎮火宣言。その後、終わりの会を行った後、無事終了の印である黄、青の班旗が赤の本部旗の下に立てられ雪山に全員が集まり集合写真を撮って解散した(写真・次頁左上)。



暮らしの中の風景の復活

今、東北では今回の大震災や原発事故では家族や暮らしが分断され当たり前で営々と続けてきた春の農作業も出来ない状態が続いています。そこはこれまでの人々が暮らしの中で築き上げてきた自然・文化も消滅したかのような変わり果てた風景になっています。上ノ原の人々の暮らしの中にあつた風景である野焼きを復活させて 8 年目、無事に所期の目的を達成したことに安堵するとともに続けることが出来たことの幸せと支えてくれた人々への感謝を痛感する二日間でありました。被災者の皆様の暮らしの安寧が一日も早く訪れることを心からお祈り申し上げます。皆さま有難うございました。

◆萬枝さん

島貫倫子・落合暢

野焼き初体験のお二人。初日、「東京から雨を連れてきた」と言われてしょんぼり。お説によると、萬枝さんは火の神様と山の神様の通訳！ 三郎さんへのメッセージもありますよ。（編集子）

東京は、私が大好きな夏に向かって着実に歩を進めている日、パートナーが運転するレンタカーは、一路みなかみへと向かいました。上ノ原に着くと、そこは白銀の世界。雪が降らない地で生まれ育ち、原先生の下で学ぶために東京に引っ越してきて初めて「冬には雪が降る」ことを体験した私は、修論提出前の大晦日、雪が降って嬉しくて、学生一人いない大隈講堂に出かけ、はしゃいだのを思い出します。そんな雪しか知らない私は、上ノ原に着いて、どんなに胸を躍らせたことでしょう。

ところが、車から出た途端、「ぼつり、ぼつり…。」雪ではなく、雨です。

「東京から雨を連れてきたな？！」と、焚き火を囲う皆さんに突付かれ、しょんぼり。

「昨日は、絶好の火入れ日和だったのに！！」と。・・・さらにしょんぼり。

茅刈りは 2、3 回経験しましたが、火入れは初めてだったので、とても楽しみにしていました。でも、この雨で原っぱは湿ってしまいます。湿ってしまったら、火はつきません。

雨がやむのを待ちながら、「山の口開け」と侵入木の



伐採をしました。八百万の神、と言いますが、こうして原稿を打っている PC にも、なんとなく、神様（？魂？）がいるような気がして、突然漢字変換がうまくいかなかったりすると、「乱暴なタイピングだったかな・・・すまないすまない」などと心の中で呟いたりします。当然、山にも神様がいて、山の神様に、「今年の春も、お山に入っているいいですか？」というお伺いと、「火を入れていいですか？」というお伺いを立てるのが、「山の口開け」の儀式でした。

さて、私も俄かに神妙な面持ちになってみながら、お神酒を分けていただいて、お伺いを立ててみましたが、雨はやむ気はないようです。どうやら神様は、「火を入れてはダメ！」と言っているみたいです。結局雨はやまず、火入れは延期になりました。

翌日。

昨日とは打って変わって、雲ひとつ無い快晴です。昨日はすぐそこの尾根も見えないくらいに雨雲が低く低く垂れ込めていたのに、今日は向こうの谷川岳がくっきり見えます。飛行機雲も一直線に伸びていきました。

「ダメだー！こんな焚き火。山の焚き火は、こうすんだ！」

湿った木で皆が必死に起こした焚き火を、一蹴でかき消して、木を一文字に組みなおしてあっという間に大きな焚き火が作られました。

そうです。萬枝さんの登場です。清水さん曰く、「組内で法事があって、萬枝さんは昨日は来られなかったんだよ。」

そうか！なるほど。だから昨日は雨だったんですね。萬枝さんは、火の神様と山の神様の通訳だもの！私が東京から雨を連れてきたせいじゃなかった！

萬枝さんが通訳してくれたお陰で、火入れ日和。萬枝さんの姿を確認した山の神様と火の神様は、「萬枝さんが来たなら許してやろうか。」と相談したようです。昨日の雨でちょっと湿っていたけれど、原っぱはどんどん燃えました。炎はあっという間に広がって、雪の合間を生き物のように前進し、波のようにならなっていました。この真っ黒な原っぱに、もうすぐ青い新芽が出てくるんですね。なんだか不思議で、とても楽しみです。

追伸:三郎さんへ。前回の「茅風」通信によって、私が学生ではないことがバレてしまいましたね。でも、茅刈り検定もまだまだ「茅刈士心得補」なので、引き続き、学生同様、ご指導よろしくお願いします！

おまけ:みなかみまで運転してくれたパートナーは、これまで全く興味の無かった分野に、私に無理やり引っ張り込まれ、先日とうとうトレッキングシューズを購入。次は長靴かな・・・？

・・・「いや、あの時は、合羽が欲しいと心から思いました。今まで、穏やかな瞬間にしか訪れていなかったことを改めて知って、振れ幅の大きいみなかみの自然と、そこで生きてきた日本人の強さに気付くことができました。」

◆藤原茅場へ復帰の喜び

関根静吾

思わぬ病から本復、半年ぶりに上ノ原にカムバックした静吾さん。終始、あの懐かしい関根スマイルも戻ってきました。(編集子)

先ずは、藤原の茅場に戻れたことを素直に喜びたいと思います。実は、昨年 8 月に退職し、ようやく自由の身になったと思っていた矢先にバセドー氏病とソケイヘルニア(所謂、脱腸)に罹ってしまいました。

ご存知かと思いますがバセドー氏病はホルモンが過剰に分泌し、新陳代謝を促進する病気です。いくら食べても体重が増えない、むしろ減る現象がみられ、もしや悪い病気ではないかと疑ったくらいです。また脱腸は脆い部分であるソケイ部分の隙間から腸が飛び出す現象です。

バセドー氏病のせいか血行が良くなり、飛び出した腸が膨らんだようで動くところすれて痛くて痛くてとても歩くのに不自由を感じました。ソケイ部分を抑えて歩くと楽なのですが道ですれ違う人々から変な人とジロジロ見られているようなのでなるべく人のいない道を選び散歩したりしていました。

ドクターの処方が良いせいか、年末にはバセドー氏病も快方に向かい、年明けには脱腸の手術を終えてようやく歩行が自由になりました。

健康には自信がありましたがあらためてその有難味を知った次第です。そういった意味でこの度の野焼きに復帰できたことは昨秋の茅刈りに参加できなかっただけに喜びもひとしおでした。

野焼き当日は目のさめるような天候に恵まれ、谷川岳、朝日岳連峰の山々がくっきり見え、素晴らしい眺めでした。例年ならば山の手側から着火して順次下がってくる今年に残雪が多いので飛び火の心配はないとのリーダーの判断で山の下側から火をつけました。炎が勢いを増し迫力を持ってパチパチと山を駆け登ってゆく姿は圧巻でした。空の青さ、真っ赤な炎、灰色の煙、残雪の白さが美しいコントラストを成し、とても感動的でした。

また初日は雨天のため、思いもよらず宝川温泉の露

天湯につかる事ができました。いつも車窓から看板を見るだけでしたので、30 数年ぶりに訪れて大満足でした。草野塾頭の粋なはからいには深謝です。

思えばこのような自然に親しむ活動に参加し始めたのは 15 年ほど前からです。当時サンワみどり基金の常務理事をしていた清水塾長から同じ藤原にある「水源の森」の間伐活動にお誘いを受けたのがきっかけです。「森林塾青水」に入会してから 6 年目に入りますがまだまだ駆け出しであります。諸先輩、同僚及び若い人達と共に茅場の更なる活性化に向け、いい汗をかきたいと思っていますので引き続きよろしくお願いします。



◆さらちゃんの絵手紙

藤原が大好きで、厳冬の雪原トレッキングにも参加しているさらちゃん。野焼きの印象を絵にしてくれました。(編集子)



◆日大生の皆さんのご感想

麗澤中学「樹木観察会」で協働している日大生物資源学科(教職課程)の皆さんが今年も参加してくれました。フレッシュな感覚で受けとめた野焼きの印象は?(編集子)

海洋生物資源科学科 森脇みなみ

天候に恵まれ、17日に野焼きができると聞きとても嬉しく思いました。みなかみ町につくと、まだたくさんの雪が残っていて神奈川とは違う風景に驚きました。上ノ原に着いて、まず、山水をいただきました。水が湧き出ているところには蛇のようないくつかの氷柱ができていて、自然の芸術を感じられました。水は冷たく、おいしくて喉がうるおいました。朝方はまだ地面が湿っていて野焼きは昼からと連絡があり、除伐や焚き木を経験させていただきました。除伐のとき、カモシカのマーキングを見ることができました。野生のカモシカが近くにいるかもしれないと思うと、わくわくしました。野焼きの前に近くのレストランで昼食をいただきました。フキノトウや季節の山菜がふんだんに使っており、みなかみ町の自然をおいしくいただくことができました。

野焼きでは、一面あつというまに燃えてしまったというのが一番の印象です。始めは熱くてなかなか近づくことができませんでしたが、慣れてくると自分で火をつけ、野焼きに参加できました。地元の方や青水さんにコツなどを教えてもらいながら、無事に野を焼ききりました。今回、土壌の改善作業に参加することができてとても嬉しく思います。1日という短い時間でしたが貴重な体験をさせていただきました。将来教師になったとき、野焼きで感じたこと、経験を生徒に伝えていきたいと思います。今回お世話になった青水さん、地元の方、また消防団の方にお礼を申し挙げます。ありがとうございました。

森林資源科学科 板橋駿介

今回参加した野焼きでは、昔から行われてきた土壌の改善の有効性と、改めて火の怖さを学ぶことができました。植物は成長すると有機物を蓄積していきます。消費者に食べられることで、有機物は循環していきます。最後にその有機物を土壌などにいる微生物が分解して、再び無機物にすることで生態系はなりたっています。しかし、分解者である微生物が有機物を分解する量には限界があり、時間もかかります。そのため数年に一度、枯れた植物に火をつけ、燃やすことで有機物を無機物にし、植物の成長に必要なカリウムを増やすことができます。人が野焼きをしなくても自然界では雷などの天災が原因で山火事が起こり、無機物が増えるのですが、山火事になってしまうとコントロールできる範囲で行う必要があることがわかりました。

また、今回の野焼きでは植物がもつエネルギーの高さを実感しました。植物は光合成を行い無機物であるCO₂を有機物の糖に変え、その糖を使って成長し、一部はでんぷんとして蓄積している。しかし、少し火をつけただけで一面が火の海になるようなエネルギーをも

っていました。このことから植物が行う光合成のすごさを感じることができました。

農芸化学科 前田剛宏

私は、生まれて初めて野焼きを体験させていただきました。私が想像していた野焼きは、髪の毛が燃えるように、チリチリと草が燃える様子でした。しかし、実際に火をつけると、瞬間に火が大きくなり、とても迫力のあるものでした。

また、野焼きは草原から森林になることをとめる役割があることを知りました。野焼きをした後は、表面は焼けて炭になっていましたが、1cmくらい下は焼けていませんでした。ススキの芽は地中にあるそうなので、表面のいない新芽や害虫だけを燃やすことができていて、とても画期的で驚きました。

草が燃えるのを見ているだけでなく、ジェットシューターを背負って火を消す作業もやらせていただきました。今回の野焼きでは、初体験が多く、とても勉強になりました。このような機会を与えてくださった青水さんには、とても感謝しています。ありがとうございました。

■芦ノ田峠のフットパス歩きと

上ノ原の生き物・外来種調べ

6月18日～19日に開催した講座「コモンズ村・ふじわら」。初日は芦ノ田峠のフットパス歩き、2日目は上ノ原で生き物調べを兼ねて外来植物の駆除をしました。(編集子)

◆芦の田峠物語

林 糸み子

生粋の藤原っ娘・林糸み子さん。昔々、芦ノ田峠の道筋に田圃がありました。そこに住んでいた「吉田おばあ」の思い出。大人のお伽話みたいな不思議なお話です。(編集子)

戦時中から居たと思います。芦の田の田圃の有った処に僅かな水が有り、その水を小さな笕を作って取り小石を敷き詰めた綺麗な水場がありました。村の人は「吉田おばあ」と呼んでいましたね。「おばあ」と言っても50歳ぐらいかな、男の人は若くて30代位小柄の人。小屋は丸太で出来てた。屋根は杉の木の皮で葺いてあって石が乗って居た。

私は実家の嫁姉さんと春先4月ごろ、薪取りに毎日出かけたものでした。

「吉田おばあ」に10時のお茶に呼んで貰った。お茶うけに「ヨメナ」だといって野草のお浸しを頂いた覚えがある。小屋の中は地面に囲炉裏が有って、莫産一枚ほどの座るところが有り板の棚が一段あった。その下に木箱が二つほど有った。棚にはお勝手道具が並んでいた。外にもいろいろな物があつたが、とても清潔感が有ったのを覚えて居る。

其の莫産の向うに筵がさがっていて、蒲団が一組位積んであり、柳行李や何かの包みが見えた。

実家の蚕の手伝いや畑の仕事を手伝って呉れたと聞いている。男の人は何をしていたのか全然聞いた事が

ない。戦時中にあの若さで、如何して兵隊に行かなかったかも不思議です。冬は如何していたのだろう。

私の知っているのはここまでです。誰か知っている人がいたら聞いてみたいと思います。芦ノ田に行ったらその小屋の痕跡が残って居るか探してみたいです。



芦ノ田峠にひっそり佇む十二神様

◆言葉不要の草地という自然環境の魅力 出島誠一

日本自然保護協会では赤谷プロジェクトを担当されている出島さんが生き物調べに参加して下さいました。“プロ”の目を通して見た上ノ原の魅力や生物多様性保全活動の意味合い、などについて語っていただきました。(編集子)

6月18日夕食から「コモンズ村ふじわら」に参加させて頂きました。残雪の朝日岳を背景とした満開のタニウツギ(草原管理の敵とは知りながら・・・)の風景はすばらしいもので、さらに足立区の子もたち「のらえもん」一行が、森と草原を楽しそうに歩き回る様子とあわせて、その風景にいたく感動しました。言葉不要の、草地という自然環境の魅力を実感したように思います。また、民宿の夕食、レストランの昼食では地物による手料理を楽しみました。短い時間ではありますが、森林塾青水の皆さんの長年の活動の成果をフィールドでも、地域社会の中でも、それぞれ堪能させて頂いたのだと思います。

昨年秋に行われた、生物多様性条約締約国会議(COP10)に向けてNACS-Jが意見をまとめた、ポジションペーパーでは、生物多様性の保全を担う地域(例えば、みなかみ町)と、利用する地域(例えば、都市部)が負担と利益を分かち合うことの重要性に言及しています。

それは、表現は異なりますが、採択された愛知ターゲット(2020年目標)では、「生物多様性及び生態系サービスから得られる全ての人のための恩恵を強化する(戦略目標D)」という目標に含まれていると考えています。



春にだけ出会えるミヤマセセリ 東京などでは絶滅危惧種

「地域の人でも都会の人でも、どんな自然の恵み(生態系サービス)に支えられて日々の暮らしがあるかを認識し、その源となる生物多様性(自然の豊かさ)を、その恵みを享受している人たちで保全する。」そんな、世界が目指す理想的な自然保護の姿を、森林塾青水の皆さんが目指し、少しずつ実現していることをはっきりと実感できたことを何よりもうれしく思いました。

NACS-Jは今年から、「生物多様性の道プロジェクト」として、国と地域の生物多様性戦略づくりのプロセスを通じて、日本社会が、自然の恵みを認識し、その源を保全する構造にシフトするきっかけをつくりたいと考えています。そして、森林塾青水の活動と、NACS-Jが2004年から続けている赤谷プロジェクトのあるみなかみ町を、このプロジェクトの重点地域の一つとすることにしています。

このプロジェクトが、みなかみ町全体の注目が高まり、にぎわいにつながるような、事業になるためにも、青水の皆さんの協力が不可欠だと考えています。今後ともよろしく願いいたします。

またお邪魔させてください。

◆ニセアカシア驚異の繁殖力

小野 丞

侵略的外来種の代表格、セアカシア。上ノ原にも、既に侵入していました。根を掘り起こして分かった驚異の地下戦略！(編集子)

2日目午前中前半のプログラムは外来種の生息確認及び排除でした。

生息確認後、前回から成長状況を確認していたニセアカシアを根から除去する作業を行う事となりました。

地表に出ている部分は約2m、太さも数センチの小木なので、それ程根は大きくないと思っていましたが、掘り出し始めると根は三方向へ分かれており、短かった二本の根でも2m以上で、地表に出ている部分よりも長い状態でした。

残り一本は掘り出せた部分だけでも5m以上あり徐々に太くなっていました。



掘り出したニセアカシアの根っこ！

この状態から地表に出ていた部分が元ではなく他に本木があり、そこから伸びた根から更新「萌根更新？」された事が確認できました。

根が途中で切れてしまったので本木の場所は分かりませんでしたが、前回伐採したニセアカシアが根の進んで行った方向にあるらしいので、その根を除去する必要が出てきました。ただし、その根から同じように何本もの根が伸びている可能性があるので完全に除去するのは困難でしょう。

今回の確認・作業で感じたことは、自然の力は我々の想像以上に力強く、それに対して抵抗する力は非常に小さいものだということです。一気に除去するためには大型機械等の使用をしなければ不可能ですので、今後はニセアカシアの若木を発見したら出来る範囲で根から除去していく作業を根気強く継続していく必要があります。

■特集：青刈り「また一つ、ススキの新たな利用の道が！」



好天に恵まれた8月6日午後と7日午前、初めての青刈りにチャレンジ。野焼きを安全に行うための防火帯づくりをかねて、野菜や果物の肥料やマルチ材として利用することが目的でした。初の試みでしたが、草野塾頭の陣頭指揮と地元の久さん、惣一郎さんのご指導よろしきを得て、早稲田環境塾・当塾のコラボ合宿参加者22名が全員無事故で作業を終えることが出来ました。

刈りとったカヤの総量はおおよそ2トン車1台分。うち、軽トラ2台分は久さんの畑に運びこみました(写真・上)。来年

の春には野菜の肥料になります。残り全ては新治村の桃季館に運んでもらいました。ブルーベリーのマルチ材として利用していただけることになりました。

この4月、みなかみ町は生物多様性地域戦略の一環として『昆虫保護条例』を制定しました。上ノ原は、その「保護指定地域」になる見込みです。“生物多様性の保全に役立っている野菜やブルーベリー”が桃季館などの棚に並ぶ日が楽しみです！これからも、環境資源の地域循環型持続的利用のための活動を地道に続けて参りたいものです。(青)

◆炎天下の防火帯造りと青刈り 一流した汗も生態系サービスー

草野 洋

第4回コモンズ村ふじわらは、8月6～8日3日間に渡って真夏の炎天下で青刈りと防火帯作設を実施しました。作業内容は、ススキの屋根材以外の利用の具体的な用途として果樹等のマルチ材を採取することと同時に野焼きの延焼防止のための防火帯作設を行うものです。



今回は早稲田環境塾との共同開催プログラムの一環として実施し、総勢22名の参加者が上ノ原に集まり、地元古老3名の方にご指導いただきました。

初日は、昼食後、車のドアに指を挟むというアクシデントが発生、急遽、病院に向かうことになり、みんなの氣勢がそがれましたが、はじめの会を行い、蜂、雷、熱中症等の真夏の作業での注意事項を確認しました。

その後、地元古老のS. Aさんの指導の下、鎌の砥ぎ方、青刈りとその結束の仕方を習い、武尊山登山道近くの背丈ほどに伸びたススキに立ち向かいました。

防火帯設置班3名は、刈り払い機を持ち南側の登山道から茅場に10m幅で刈り払いして、刈った草も束ねていきます。

皆さん慣れないのと猛烈な暑さの中の作業のため、はじめは戸惑っていましたがそのうち慣れてカマの音も良くなりました。そして結束の仕方も上手になったところで皆さんの疲労度を見て16:00にタイムアップ、この間流した汗は作業着もズボンもびしょりですぶぬれ状態。十郎太沢の冷たい清水がありがたく生き返った気持ちでした。



2日目は、午前中青刈りと防火帯設置の作業予定、鎌砥ぎも自分で出来るようになり、地元古老のH.Hさんの先導の下、昨日と違う作業地に入ろうとした瞬間、H.Hさんが顔の辺りでカマを振りながら飛び出してきました。蜂です。スズメバチが数匹 H.H さんを追いかけてきます。左こめかみあたりを刺されたようです。幸いなことに、腫れてはいるが大事には至らないようです。急遽場所を変えることにして移動。

昨日、作業前に蜂が飛んでいないか確認したときには姿を見せなかった蜂ですが、地面に巣を作りかけていたようです。H.H さんに「今までにさされたことがあるか」尋ねると「何度もある」とのこと、その時と今回の症状に変わりはないかと再度聞くと同じとの返事、まずは大丈夫だろうが様子を見ながら作業をすることにしました。これが参加者だったらたぶん病院に直行しなければならなかったでしょう。

この日も、暑い日でしたがアクシデントにも負けず皆さん頑張り、昨日の倍の汗をかき、刈り取り量は3倍ぐらい。約3時間の作業で2トントラックと軽四1台分(約

2.5t)の青刈りススキを刈り取りました。

刈り取ったススキは新治の果樹農家の方のブルーベリーとイチゴ畑でマルチとして使っていただくことになっており13時、既に到着していた2tトラックにみんなで積み込みました。

また、軽四一台分は H.H さんの畑の堆肥として使っていただけるとのことです。



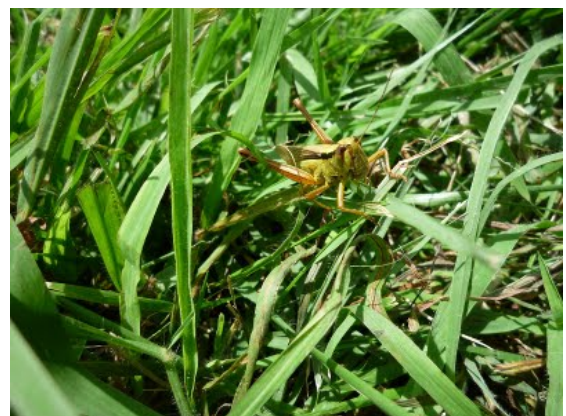
防火帯班はこの日も2台の刈り払い機を駆使し、南側のカラマツ林と境を刈り払い上部作業路まで繋げました。

今回の青刈り、防火帯設置、連日のアクシデントにも負けず、ほぼ予定通りの作業を終えることができました。

皆様が刈り取った青刈りススキは、おいしい果物や野菜を育ててくれるでしょう。

これもススキ草原の生態系サービス、もちろん皆さんが体験した作業と流した汗、心地よい茅風、眺めた風景もその中にいれてもいいでしょう。茅場から得られるサービスはまだあります。今度はススキの穂が揺れて歓迎してくれます。

参加者の皆様、地元の方々、役場の方、本当にありがとうございました。



◆芒の青刈りに参加して

酒井一彦

初デビューにして、いきなり炎天下の青刈り！ でも、とても楽しそうに良い汗をかいておられた酒井さん。早稲田環境塾を代表してご感想をお願いします。(編集子)

御礼

森林塾青水塾長清水様初め塾の方々、みなかみ町藤原区の方々には8月6日から8日までの3日間大変お世話になりました。皆様のご指導とご講演により入会地の大切さ、入会地を維持していくことの難しさを実感として知りました。

感じたこと

①永年にわたる森林塾青水の地元に溶け込んだ地道な活動と上ノ原草原の新たなサービス価値を作り出していこうとする積極的な発想と活動に頭の下がる思いを致しました。

②3日間天候にも恵まれ、上州武尊山、谷川岳等々の青山に囲まれた上ノ原草原の夏の清々しさと夏の入道雲の白さは地上では実感できない素晴らしいものでした。

高原の青茅ゆれて山並みへ
秋空に吸い込まれじと四方の山



③青茅の刈入れ作業の実体験は厳しいものがありました。しかし、刈った後の満足感と疲労感は久しぶりのいい汗をかいた経験でした。

④指導して下さった久さんの目の輝きのご高齢にもかかわらず生き生きとし喜んでおられるようでした。久さんの実家の近くに電柵があり、それを見て原先生が「今や人間が柵で覆われる時代になった。嘆かわしいことである。」と説明された後、久さんが「昔は犬が沢山いて猿は下まで降りてこなかったし、草原では牛や馬などの家畜を沢山飼っていた。」とおっしゃったことが昔の人の生活とその知恵に触れたような気がしました。熊狩りはもうないのだろうか？

⑤森林塾青水より戴いた資料の中に次のようなことが書かれていました。「現在の日本の草地面積は国土の1パーセントくらいだが、大正時代には国土の11パーセントが草原だった。明治時代と現在の国土利用の比較では、農地も森林もさほど減っていない。一番減っているのが、草地と湿地。どちらも守るべき動植物がか

なり集中分布している場所＝自然再生のホットスポットになっている。」上ノ原の茅場も200haから21haに減っているとのこと。それでも昆虫等の生き物が多くいるとのことで、竹内さんの「子供にこの場を提供し、昆虫や植物と触れ合う場を積極的に作る。」提案に首肯できました。

◆みなかみ町合宿を終えて

石原光恭

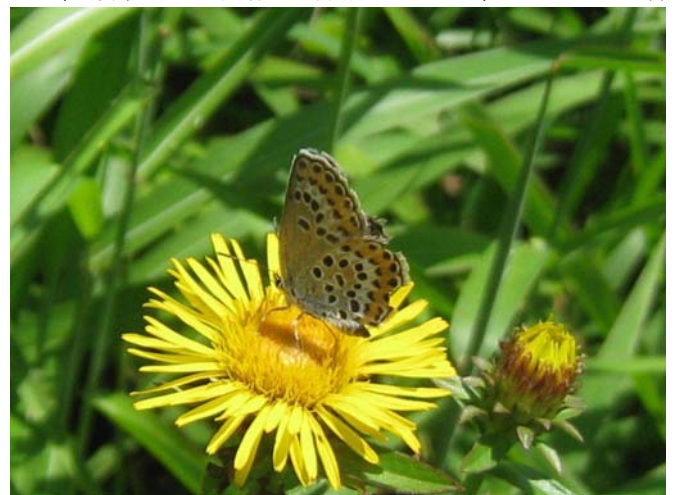
早稲田環境塾第5期生にして森林塾青水学生部のホープ。その石原くんが学び気になったこととは？(編集子)

大宮から計2時間弱、首都圏から交通の便が良いな、というのが最初の感想だった。新幹線と自動車を乗り継いで、群馬県みなかみ町藤原に入った。蛇口をひねると水が出る。私を含め、都市住民たちが勘違いしているこの「当たり前」を、今一度見つめ直す合宿がはじまった。

私事ながら、8月6日は大学の夏季休暇の始まった日であった。7月最後の週から8月5日までの長い期末考査期間は、息が詰まるような1週間であった。学生の本分ではあるのはわかっているが、それでも部屋に

閉じこもるのは好きではない。ストレスのせいか、少し歩くとすぐに息が上がったり、胃の調子が悪くなったりしたのを覚えている。しかし、そうした体の不調は、帰る頃にはいつの間にかなくなっていた。

今回、初めて森林塾青水の活動地である上ノ原“入会の森”を訪れて、私は強烈に“夏”という季節を感じた。晴れ渡り、草原から見上げると遮るものが何一つない高い空。青刈りをしているときの、日差しの暑さと草の匂い。そして、そこかしこで飛び交う昆虫の多さ。青刈りなどフィールドでの実践の時間が比較的長かったおかげで、よく観察することが出来た。また、地元の古老に習い、自らの体を動かして得た経験は、自然と向き合うことの喜びを感じさせた。例えば、体の疲労感である。自然と向き合って労働したときと、都市部で筋力トレーニングをしたときでは、筋肉の疲労感が全く異なる。つまり、局部的・不自然な痛みではなく、心地よい全体



的・自然的な痛みなのである。これこそ経験知と言えるものだと思う。これは実践だけにとどまらない。フィール

ドでは、水と人間との関係について説明を受けた。上ノ原には“十郎太の泉”という霊峰・上州武尊山からしみ出した水が湧き出す泉がある。どんなに気温が暑くても、12 度くらいの冷たい水が湧き出ている。そして小さな泉はやがて流れを大きくし、利根川へとつながっているのだ。また、これらの流れは、藤原を通していくときに住人たちの生活の基盤になる。昔から各集落の戸数は川の大きさによって決められていたし、農業用水もこれらの川から水が引かれているという。今回、集落内を雲越家住宅や應永寺を中心に散策することができた。実際、家と家の間や道路脇、田畑のそばや山の中にまで、至るところで水が流れていた。以上のように、机上や都市、教室で教わる時の何倍もの説得力を持って、経験知は蓄積される。理屈だけではなく、「そこにある」ことを自らの見聞きした経験から思い知る合宿となった。

しかし、一つ気になったことがある。それは地元の人たちの理解を得られていないらしい、ということだ。「宗教団体的一种であるかのように受け止められている」とは、青水の現地代表である北山さんの言葉である。ロッジ高嶺のオーナーである中島さんによれば、北山さんは藤原の人たちに受け入れられているそうである。しかし、その評価も北山さん本人によれば、違和感を覚えることがあるそうだ。青水が担っているコモンズの創造という素晴らしい活動が、なぜ地元の人たちに理解されないのか。ここに、今後私が関わっていく上で取り組むべき課題があるように思う。この問題を解決しなければ、本当の意味で流域コモンズを完成させることはできないはずだ。地元の人たちが日々何を想い、どのようなことを考えて生活しているのかを知りたい。まずは彼らに寄り添って、それからどうやってそれらの意見を汲み取って活動に反映させられるのかを考える必要がある。

◆上ノ原の草原―“いきもの”の賑わう草原へ―

増井大樹

阿蘇生まれのハラガキ族にして草原再生ネットワーク会員。当塾を代表する知見の人・増井さんが、青刈りのもう一つの効用を示唆してくださいました。(編集子)

8月6日7日の2日間、早稲田環境塾・森林塾青水コラボ合宿「寺小屋」に参加し、上の原の草原に訪れました。僕がこの上の原に訪れるのは昨年秋に次いで2回目、夏に来るのは初めてのことで、今回の作業のススキの青刈りを楽しみにしながら上の原の草原を目指します。山道を車に揺られ草原につくと、そこには快晴の青空と緑がたなびく美しい景色が広がっていました。まさに「癒し」、草原好きの僕にはたまらない光景です。



草原に咲くヒヨドリバナ

そして昼食時には草原を散策、一見すると緑一色に見える草原にはヤマユリやヒヨドリバナ、オトギリソウといった花々が控えめに咲いており、草原の豊かさを感じさせます。きっとほかの季節にも様々な花々が咲いていることでしょう。



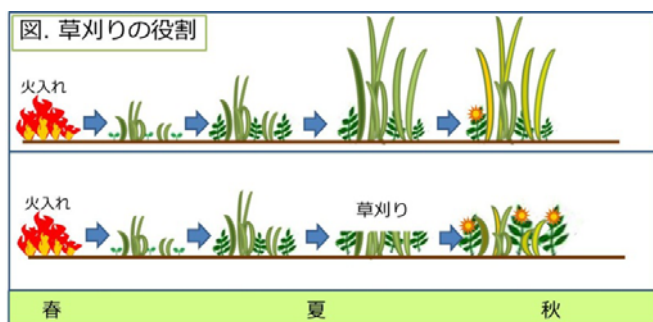
昼食後は、地域の方に草刈の方法や、草の利用などの当時の話を聞き、草をたい肥にするために夏場に馬に6束積んで家に運んだこと、屋根に使う茅は3月ごろの雪のあるうちにソリを使って運んだことなど、貴重な話を聞くことができ

ました。また、今回刈った草も実際にたい肥にして利用することが清水塾長から説明がありました。地域にあった草原や自然の利用について話を聞き、そして実際に草刈の作業をすることができる。このことは、僕たちが草原について考える貴重な機会になりました。

さて、草刈作業開始です。僕は草野さんの指導の下、草刈機を使って来年の火入れの延焼防止のための防火帯づくり(輪地切り)を行いました。この作業は火入れの時に延焼しないように防火帯を作るものです。草刈をすることによって防火帯を作るだけではなく、実は草原の“いきものの賑わい”のためにも、この草刈りは重要な働きをします。春先に火入れをした草原はその後、ススキなどの成長が早い種(優占種)がどんどん成長し、地面の近くが暗くなることで優占種より背の低い植物の成長を抑制することがあります(次頁の図、上)。

草刈りをすることで、この優占種にダメージを与えることで、ほかの植物種にも光が当たる環境ができ、いままで個体数が少なかった植物種が増えることがあります(図、下)。具体的には長野県戸隠高原のクマイザサの優占する草原で行った刈取り実験^{*1}では8月に刈取りを行った草原では次の年にウメバチソウという背の低い植物の開花が増えたという実験結果もあります。このように草刈りをする場所やしない場所、草を刈る時期が違う場所など、様々な空間が上の原の草原の中にできるので、今まで以上にいきものが賑わう環境ができるのです。

草刈りを小休止して遠くを見ると楽しそうに鎌で草を刈る他の参加者が見えました。人も自然も賑わう上の原をこれから先もずっと見られよう、来年もまた草刈りに励みたいと思います。



*1: 大窪久美子 前中久行 クマイザサ優占群落における野生草花の保全を目的とした時期を変えた刈取りの影響 1992 造園雑誌 55 (5) : 193-198

◆特別寄稿

のらえもん 10 周年の記念日に

森林塾青水の案内受ける

しかはま自然観察会ののらえもん 代表 古高利男

足立区の児童・家族を対象に古高さんが主催する「しかはま自然観察会ののらえもん」。その10周年特別企画『山村の力を知る』の実施にあたり、谷川岳や奈良俣ダムと上ノ原をお訪ねいただき交流の機会を得ました。(編集部)

2011年6月19日(日)晴れ。上の原の背後の山々は、緑一色だった。

四葉マークの大型バスが、上の原に着いた。45名のスタッフ、保護者、小学生、幼児が降り立った。案内役は、もちろん森林塾青水の皆様だ。

まずは全員で、清水湧き出るそばの「水守像」の除幕式に立ち会わせてもらった。地元の朝倉様から、「この清水がいつまでも湧き続けるように・・・」との祝詞を聞いてから、それぞれの班は森に消えていった。

のらえもんの参加者にとって、このようなスケールの大きい自然観察会に参加するのは初めてである。そのためか、講師の説明に深く心を動かされたようであった。さらに、親も子も、このすばらしい本物の自然を体感することに精一杯であった。言葉で表現することの、あまり

にも無力であることに気づいたのだった。

保護者のふりかえりの感想を列記する。(原文のまま)

「森と草原を見て、お話を聞いてよかったです。泉の水もあまくて、クマのつめあとの残った看板、わらびを採らせていただいたり、生きている森にいました。」

「上の原草原での自然観察会は、清水をも含めて、東京ではできない貴重なすばらしい体験でした」

「上の原草原と森林のツアーも、興味深く参加出来ました」

「草原の散策は、私にとっては大変でしたが、気持ちのよい汗をかかせてもらいました」

「森林塾青水の方の説明を聞きながらの散策は、とても感動しました。そして、山焼の意味、木・草の種類などを説明して下さった北山さんの誠実さが伝わってきました」

私自身は、森林塾青水の会員である。これまでに、春の上の原、茅刈り検定・冬の上の原を体験させてもらった。どれも深い感動をいただきながら、「のらえもんの会員の方々を、ぜひともここに連れてきたい。この本物の大自然を味あわせてやりたい」と思うのだった。この度、その思いが清水塾長をはじめ森林塾青水の方々のご協力を得て、最高の形で実現できたことが、うれしさとともに感謝の念でいっぱいである。

感謝の気持ちを込めて、私のふり返りを記したい。

○青い空緑の草原に「にんげん」たちがとけ込んでゆく
○のらえもん 10 周年の記念日に森林塾青水の案内受ける

○湧水を手と口で触れ「おいしい！」と水道水とのちがいにodorく

○「この跡は？」とクマ出没の話聞く主人は森のクマ・テン・トンボ

○これはフキ、これはギボシと名をあてて山菜汁のおかわりをする

○のらえもん45人の面々は上の原に立ち深く息を吸う



上ノ原で寛がれる皆さま

□ 編集後記 ～塾長のつぶやき～

○十二神さまの内、草原の神さまが3神も！ 島貫さんの説によると、萬枝さんは火の神さまと山の神さまの通訳らしい。あらためて藤原の歴史をひも解いてみると、十二神さまは一体の山の神さまではなく12の神々の総称もしくは集合体らしい。大山祇神、奴津知神、久々能知神、加屋野姫神、原山祇神、葉山住神、於久山祇神、志気山住神、久良山住神、於止山住神、戸山祇神、満佐加山住神、と居並ぶ。

「里地」を取り巻く「里山」の様子がよくわかる神々の構成ではないか。12神の内、加屋野姫神と原山祇神、葉山住神は茅場や草山を司っていたのでは。十二神さまの四分の一の勢力！ 往時の暮らしにおける、草地の重要性を示唆しているのではないか。分からないのは、満佐加山住神。通訳史・萬枝さんに教えていただきたい。



草木の上にも神はやどれるを
八百万神といひしいにしえ 佐太郎

○懐かしい峠道は元気の素 林あみ子さんの芦ノ田峠にまつわる「吉田おばあ」の思い出話。実はあみ子さんには、もっと身近で懐かしい青木沢峠があった。以下、5月に塾の仲間と一緒にフットパス歩きした際のご感想文を披露したい。

「正確には60年ぶりだと思います。(中略)道をたどるにつれて、つい最近の事のように蘇えてきて、ただただ懐かしくて、私を待ってくれていたように胸の奥に踊り弾む何かが潜んでいました。(中略)峠の十二神様に逢えた時は、胸にじんと来ました。(中略)中の十二神様も変わりなく、高い処に鎮座して見えましたが、庚申様(写真・右上)はどんと貫禄をもって座っておいでだった。変りなかった。先輩たちに習って朝夕礼をして、学校に通った9年間。今ある私は、この神々に守られてきたのですね。改めて頭を下げる事が出来ました。ほんとに良かった。とても楽しかったです。

芽木峠久遠の友に逢うごとし

駆け抜けし童はいづこ野地すみれ」

足に自信がないので途中で引き返させてもらうかも、と仰っていたあみ子さん。心配をよそに、終始笑顔で完走。生まれ育った懐かしいふる里の峠道が秘める元気の素。もっともっと、活用したいもの。



○万葉集でもっとも多く詠まれている植物は？ 以前この欄で、万葉集ではサクラよりススキが人気上位と書いた。4500首以上の内、詠まれた植物は160種余り。日本人好みの代表みたいに思われているサクラは意外と少なく20～30首、対するススキの類は71首。ハギ、ススキ、キキョウ、オミナエシといったススキ草原の仲間を加えれば、万葉の時代の人気ランキングはススキ軍団>ウメ>サクラの順になろう、と。

ところで、鷲谷いずみ先生によると、万葉集でもっとも多く詠まれている植物は萩であり、その数141首にのぼるという。ハギ類は山火事後にできる原や火入れで維持される野における代表的な植物。(「グリーンパワー」2011.9号) 今、上ノ原はこのハギやオミナエシなどススキ軍団が色とりどりの花をつけ、風と戯れている。



○新たな利用の道と供給先の確保を このところ、上ノ原の自然環境資源の新たな利用に弾みがついてきた。昨秋刈ったススキの仮設住宅屋根用断熱材、この夏青刈りしたススキのマルチ材や肥料としての利用。ミズナラ林でも、今春実施した原木キノコの植菌と9月に予定の薪ストーブ用割り薪づくり。

利用することがより良い管理につながるという考え方によるもの。いずれも、草地と森林の生物多様性を豊かにし、生態系サービスの充実につながっていく。よい事尽くめだが、課題は供給先の確保。出来れば地元ないしは流域で使いまわしてもらい、“地域循環型・持続的利用”の道を拓きたいもの。

誠実の友に実りの秋来る

(青)



上ノ原は人と生き物の入会地

講座「コモンズ村・ふじわら」2011

参加者募集



第5回 上ノ原の初秋を楽しむ：ミズナラ林の生き物調べと草原の虫の音観賞

森林塾青水は茅場（ススキ草原）と薪炭林（ミズナラ林）、古道、古民家など、水源地域の自然・文化資源の再生と活用に取り組んできました。講座「コモンズ村・ふじわら」はその実践プログラムです。

8年目の今年は、これまでの経験と成果をふまえ、地域資源の恵み（生態系サービス）を持続的に利用する仕組み「流域コモンズ」の構築活動に入ります。今回はミズナラ林の仕事です。ミズナラ林の生き物調べ、春に植菌したキノコほだ木の伏せ込み、ミズナラ林の伐採などを予定しています。

参加者を募集します

- 日程 9月24日（土）～25日（日） **締切日9月9日**
- 集合 初日の10時20分、JR上毛高原駅改札口
〈上越新幹線〉東京 8:52—上野 8:58—大宮 9:18—高崎 9:52—上毛高原駅 10:14
- 参加費 10,000円（森林塾青水正会員・準会員は9,000円、学生会員は6,000円）
※宿泊費、食費（夕食・朝食・昼食）、保険代、資料代などを含みます。初日の昼食は各自持参して下さい。現地までの交通費は自己負担です
- 宿泊 民宿「吉野屋」／群馬県みなかみ町藤原3690（0278-75-2710）
- 服装など 野外活動に適した服装（長袖、長ズボン、軍手など）。その他、水筒、雨具、カメラなど
- 申し込み・問い合わせ 森林塾青水事務局・コミュニティデザイン（浅川潔）／東京都中央区湊1-2-3-301
【ファクス】03-6228-3504、【メール】info@commonf.net
- 当日・緊急連絡先 草野携帯（090-3390-8406）又は清水携帯（090-3575-2283）
※講座コモンズ村ふじわらは地球環境基金の助成を受けて開催されます。

第1日目 9月24日（土）

時刻	内 容	備 考
10:20	上毛高原駅集合	
11:00	上ノ原「入会の森」へ ～ ススキ草原の自由散策	
12:00	昼食・休憩（弁当は各自ご持参下さい）	
13:00	・ミズナラ林の生き物調べ ・ナメコほだ木の伏せ込み（春に植菌したもの）	海老沢リーダー 草野リーダー
16:30 17:30	・一畝田「みんなの家」古民家へ 民宿へ	
18:30	夕食～交流会（BPAのお仲間 vs 森林塾青水の仲間） ～虫の音観賞&星空ウオッチング	民宿「吉野屋」 上ノ原（雨天中止）

第2日目 9月25日（日）

時刻	内 容	備 考
7:00	朝食	
8:30	・ノコ原木と薪原木の伐採：ミズナラ林 ・ミズナラ林管理道兼散策路の整備	
12:00 13:30	昼食～10月11月の活動計画についてなど 解散 → たにがわ416（15:19上毛高原駅発）	レストラン「幸新」